第 762 号 平成20年 11 月20日発行（毎月20日発行）
昭和 49 年 8 月 31 日　第三種郵便物認可

2008 年（平成 20 年）
11 月号（No. 762）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部　150 円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

天帝の峰、クーラカンリで痛恨の事故発生
雪崩に逝った3人の仲間

高橋和弘

10月1日、チベットの高峰クーラカンリで雪崩が起き、会員を含む隊員3名が亡くなった。出身大学や派遣母体を超えて、個人的なチームとして組織された登山隊だった。事故の経緯を高橋隊長に報告してもらう。

1999年5月9日、私と加藤慶信はロープをつなぎ合い、ヒドンクレバスの潜む雪稜をその収束点に向けて歩を進めていた。最後の雪壁を上がり十数メートル。眼前に未踏の最高峰ガンケルプンズムが飛び込んできた。周囲を見回す。広大な台地のテーブルマウンテン、おそらく名前もないであろう無数の山々、荒涼としたチベットの大地に宇宙から飛んできた宝石を思わせるプマヨンツォ。息をのむ光景であった。自然の偉大なる造形から発せられる気に満ちたその頂は、神の存在を感じさせるほどであった。このリャンカンカンリ頂上での至福の時を、かけがえのない素晴らしい仲間と共有できたことは、私のなかで特に大きな財産となっている。

そしてわれわれの登山活動を威風堂々とした姿で常に見つめ、私の心に残る存在であったのが、天帝の峰、クーラカンリであった。

このリャンカンカンリ登山は、大学や大きな派遣母体による登山隊ではなく、まったく個人的なチームとして行なわれた。育ったバックボーンの異なる者同士が、ひとつのチームを作り、未踏峰に挑む。出身母体が異なるがゆえに生じる意見の対立を、過去の登山隊で経験していたが、この登山隊はお互いの長所を相乗させ、あたかも何年もかけて組織されたかのような素晴らしいチームであった。

登山隊の組織化とその精神

あれから9年、私と加藤は明治大学の登山隊でいくつかの高峰に登頂する機会に恵まれ、また各自の目標に向け、登山活動を続けてきた。そうしたなか、リャンカンカンリのように各大学山岳部OBが集まって、ひとつの大きな登山をやろう、という気運が芽生えてきた。9年前、若手隊員として参加し学んだ多くのことを、今度は隊を率いるかたちで継承していければ、と考えた。いくつかの候補のなかで、経験の浅い隊員にも頂上に立つことで得られるものを感じてほしいという思いと、9年前に見たあの山が、ずっと心の中にあったこと、そしてその主稜縦走は未踏であることなどから、クーラカンリの縦走および主峰の全員登頂が、目標として申し分のないものであると考え、この登山隊がスタートした。

目　次

天帝の峰、クーラカンリで痛恨の事故発生
　雪崩に逝った３人の仲間‥‥‥1
シュラギントワイトと日本山岳会‥‥4
各支部で展開する「森づくり」
　活動のあり方‥‥‥‥‥‥‥‥‥6
東西南北‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥8
　アルプスの北壁めぐり
　ウェストンと謎の笠ヶ岳
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥9
　資料映像委員会／集会委員会／
　緑爽会／山の自然学研究会
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥12
　秋田／宮城／北九州
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥14
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥16
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥17
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥17
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥17
INFORMATION‥‥‥‥‥‥‥‥‥18
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥18
さんけん通信‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 ‥‥‥‥‥‥ 10～20時
水・金 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 13～20時
第２、第４土曜日 ‥‥‥‥‥ 閉室
第1、第3、第5土曜日 ‥‥ 10～18時
年末年始休室 ‥ 12月29日～1月6日

近年、最も高所登山の経験が豊富な加藤(32)を登攀隊長として、愛知学院の桜井孝憲(34)、早稲田の有村哲史(27)という両大学のなかでも特に意欲的に取り組んでいるOBが隊に加わり、最年少の明治の三戸呂拓也(23)を加え、登攀の中心メンバーが決まった。その後、リャンカンリ登山隊では副隊長を務めた中村進さん(62)もこの計画に加わり、2004年にかなわなかった主峰登頂を、今回は撮影担当として目指すことが決まった。また、1991年、92年、日中合同ナムチャバルワ登山隊でマネジャーを担当した梶田正人氏(47)、第48次南極観測隊員の志賀尚子先生(42)も加わり、総勢8名からなる登山隊が結成された。

異なる大学山岳部の出身者同士がひとつのプロジェクトを独自に作りあげていく、というリャンカンカンリの登山で培われた精神をこの登山でも継承し、各隊員がそれぞれ専門分野で力を発揮して準備が進められたが、出発までには幾多の障害があった。3月14日に始まるチベットでの暴動、それに伴う入域規制、北京五輪のための警備強化などにより、外国人のチベット入域が困難な状況下にあった。そうしたなか、中国チベット登山協会との連絡窓口として許可取得作業を担当していた梶田隊員が、7月20日に埼玉県で沢登り中に亡くなるという事故が発生した。残された隊員は、悲しみを胸に9月の出発に向け、登山許可取得をはじめとする一切の準備を立て直し、そして多くの方から多大な協力を得ながら、9月14日、7名が梶田隊員の魂を胸に日本を出発した。

突然の事故

登山隊は9月20日に麓のザリ村に移動、数日間の滞在の後に標高5350メートルのABCに入った。今回、われわれが立てた計画は、クーラカンリ北壁から下る氷河をつめ、5900メートルのC1から667メートル（前衛峰）に突き上げる支尾根をたどって未踏の北稜に上がり、北稜上に2つの前進キャンプを設けて、まず縦走隊の下降路を全員で作る、というものであった。その後、縦走隊と北稜隊に分かれ、縦走隊はC1から北壁側稜（東海大が登ったルート、また は東端の急峻なリッジ）を東峰へ上がり、主稜線を主峰へ縦走、北稜隊と合流して下降する予定であった。

ABC上部から望むクーラカンリ北面。右から主峰、中央峰、東峰

ABC入りまではまだモンスンの雲に覆われる日が多かったが、雲は6500メートル付近にかかることが多く、それより下部では、降雪はあってもちらつく程度で、まとまった積雪はなかった。この雲も登山を開始するころから取れはじめ、気圧の谷の通過時も、せいぜい1～2センチの積雪で、すぐに解けてしまう程度であった。

こうした天気に恵まれ、C1の設営は予定通り進み、モンスーン明けとなった9月30日、C2へのルート工作に向けたステージが始まった。この日、ルート工作隊の加藤・有村、撮影のため2名に同行した中村がC1入り、翌10月1日、前衛峰へ突き上げる尾根へルート工作を開始した。尾根末端はもろい岩のため、尾根北側の雪の斜面へフィクス工作を開始した。一方、私は桜井、三戸呂とC1入りのため、午前8時にABCを出発した。

この日、午前11時に両チームとも順調に行動しているという無線交信を最後に、加藤チーム3名と連絡が取れなくなってしまった。午後5時を過ぎてもルート上に姿を確認できないことから遭難を認識し、私と桜井が捜索に向かい、午後6時50分、6000メートル付近で3名の遺体を発見した。上部斜面には雪面が割れた跡があり、3名は雪崩に見舞われ、下部斜面まで流されたものと判断できた。

即時登山は中止、遺体搬送および撤退作業に全力を注ぎ、ザリ村住民の多大な協力を得て、5日間かけてザリ村へ搬送し、6日早朝にラサにてご家族と対面、9日にご家族に抱えられ帰国した。

日中登山交流史そのものとも言える中村さん、高所登山界を牽引

すべき存在であった加藤、これからの日本登山界を担うホープとして嘱望されていた有村、さらに日中登山の架け橋として大きな役割を果たしてこられた梶田さん。彼ら4人とともにひとつの目標に向かったこの1年間は、残された4人の心に、一生の宝として強く刻まれていくことになろう。同じ意志を持った者同士が、出身母体の枠を取り払って作った小さなチームであるが、同じ意志を持って支えてくれた多くの協力者、関係した人すべてがこの登山隊の一員であると思っている。

かけがえのない仲間を失った痛みは一生消えないし、消さずにいようと思う。そしてそれ以上に、彼らの登山に対する姿勢をわれわれが受け継いでいくことで、この登山隊が一層意味あるものになる、と考えている。

最後に、われわれクーラカンリ登山隊員全員の意志を代弁する文章として、ＡＢＣで加藤が残した文章をここに掲載する。

加藤慶喜が残した手記

「私たちは本日無事、ＡＢＣ（アドバンスド・ベースキャンプ）を約５３００メートル地点に建設しました。ここを拠点にして、これから本格的な登山活動が始まります。ついに目指すクーラカンリの麓に辿り着きました。ここに来るまでにすでに多くの困難がありましたが、数え切れない程の多くの方々のご協力、ご支援があってこその今日のＡＢＣ建設だと思っています。自分の恵まれた境遇を思う時、これから山の中で過ごす数十日を日々懸命に重ねていかなければならないと強く感じています。

僕は昨日、有村隊員と先行してＡＢＣに入りましたが、今朝、目覚めると眼前にクーラカンリがこの高燥のチベットに屹然とした姿で立ちはだかっていました。１年前、クーラカンリを目標に決めて以来、寝ても覚めてもこの山の事が自分の心を占拠し、想い焦がれてきただけに、恋する人にやっと出会えた感じです。この山を登るために、縦走するために、生きて還るために何度も何度も頭の中で想像して、シミュレーションを繰り返してきた。

ABCに手記を残して逝った加藤隊員

山はその荘厳さゆえに、美しさゆえに厳しい残酷な側面を併せ持っている。いまこの夜空を彩る無数の星々と同じ程の危険をはらんでいる。これをどう回避してその山に登るのか。雪崩を、クレバスを、落石をどう避けるのか。高山病で動けなくなったらどうするのか。７０００メートルを超える壮大な頂上稜線で悪天につかまったらどうするのか。いくら考えても答えの出るものではないが、それでもひたすら考え抜く事が山に向かうための準備の精髄と言ってもいい。

「絶対に事故を起こしてはならない」。これが大前提としての出発点でなければ、山に登るべきではないだろう。物事に、この世の中に「絶対」というものはあり得ない。それでも僕たちは「絶対」を心に誓い、「覚悟」をしなければならない。「死んでもいい覚悟」ではなく「何があっても生き抜く覚悟」を。

リスクについて考えるのと同じように無事登頂に成功し、下山した時の喜びがもたらす幸福感、充足感についても、何度、夢想してきたことだろう。日々の時間を埋め尽くすほどの想像が、この1年の生活を支えてきた。そして今僕たちは現実にその山の前に立っている。想像、空想、夢想ではやはりそれなりの喜びしか得られない。生きている僕たちは、この厳しい現実世界のなかで膨らませてきたその夢を具現化することで、初めて本当の幸福感が得られるはずだ。

そのために自分のすべてを出し切り、新しい世界を切り拓きたい。この素晴らしい仲間達と共に」

＊

11月8日、東京・目白の学習院大学で、日本クーラカンリ登山隊の報告会が開かれ、高橋隊長から事故の報告があった。1日11時すぎ、前衛峰から派生する支尾根の下部６０００メートル付近で、30度から40度の斜面をルート工作中、足下、もしくはやや上方から雪崩が起きたと思われる。（編集部）

カルチャー

シュラギントワイトと日本山岳会

シュラギントワイトの功績

ドイツ・バイエルンの名門シュラギントワイト家で生まれた長男・ヘルマン、次男・アドルフ、三男・ロベルトの三兄弟のうち、上の2人は、科学者としてもすでにアルプスでの登山と学術調査で業績をあげていた。彼らはヒマラヤでの調査も熱望していた。

そこで、三兄弟は、時のプロイセン王ウィルヘルム四世の支援を受けて、当時のインドの統治者「東インド会社」の嘱託として、公務の目的で、地磁気や気象等の調査研究や観測を行なうことになり、1854年2月にイギリスを離れてインドへ向かった。

調査活動はヘルマンとアドルフの2班に分かれ行動した。行動は2年半にわたり、その最後にアドルフを不慮の事故で失ったものの、困難な調査をやりとげた。

シュラギントワイト兄弟が、19世紀中頃にインドからアジアの高地にかけて行なった学術調査は、この地域でのパイオニアワークそのものであった。兄弟が協力、分担した実地踏査でも成果を上げ、素晴らしい報告書にまとめあげている。とりわけリトグラフによるパノラマ、風景画は、当時として最高の技術と言われ、その見事な成果は世界中から絶賛を浴びている。

ヘルマン、アドルフ、ロベルトのシュラギントワイト3兄弟

リトグラフでの正確なスケッチは、登山史にも影響を与えている。アドルフ・シュラギントワイトによる正確な表現は、ナンガ・パルバットの登攀ルートの発見に貢献した。ドイツでは、登山のクロニクル研究家などからも、150年の歴史を経た今日、あらためて評価を受け、見直されているという。

日本山岳会との関係

シュラギントワイトの当時の報告書は、大きく分けて次の3種類が刊行されている。

①『インド及び高地アジア学術調査報告書』全4巻

テキストと略称されるもので、英文。東インド会社から委嘱された学術調査であるので、まず最初に英文による報告書が刊行された。

第一巻　天体観測による緯度、経度の決定と磁気観測、旅行概要

第二巻　高度の測定と計算

第三巻　現地語による路線ノート

第四巻　気象

②『アトラス』大図録集

前記本文の付録の形で、1196年に95センチ×63センチの超大型の図録集が刊行された。厚手の紙を使ったリトグラフ（石版画）で、美しいパノラマ、風景画、地図など全部で44葉（46図）。その第一図が最も有名なガウリサンカール。

③ドイツ語による紀行文

公式の報告書はすべて英文であり、しかもいわゆる読み物ではなかったので、ヘルマンはドイツ語による紀行書を執筆した。

第一巻　インド

第二巻　高地アジアⅠ

第三巻　高地アジアⅡ

第四巻　高地アジアⅢ

ルームに展示されているシュラギントワイトのカンチェンジュンガ・パノラマ図

シュラギントワイトの『アトラス』は、虎ノ門時代には、木暮理太郎会長から寄贈され、本会図書室に収蔵されていたが、終戦直前の五月の空襲で、灰燼に帰してしまった。次なる『アトラス』が収蔵される日が待たれていた。

山本健一郎会員の提案で、本会の百周年事業として、購入すべく海外の古書店にも照会してみたが見つからず、なかば諦めかけていたところ、東松山市在住の松崎中正会員から、平山会長（当時）あてに書簡が届き、百周年の記念として、『アトラス』が寄贈され、本

会図書室に収蔵されることになった。

薬師義美会員の調査によれば、日本国内には6冊の『アトラス』が所蔵されているが、本会の『アトラス』が最も保存状態がよいとのことである。

なお、当初、松崎会員の土蔵で見つからなかった報告書の本文「テキスト」3冊も、後に追加して寄贈された。

その後、本会ではハイヘルさんの厚意で、ドイツより『インド及び高地アジア学術調査報告』全4巻、紀行文（独文）全4巻の覆刻版を入手したので、シュラギントワイトに関する刊行物は完全にそろえることができた。その上、水野勉会員が、後述するようにバイエルンの国立図書館所蔵の『シュラギントワイト兄弟の遺稿・関係資料目録』も加わったので、今後のシュラギントワイト兄弟の研究には、大いに役立つことが期待される。

（松田雄一）

寄贈された『シュラギントワイト兄弟の遺稿・関係資料目録』

バイエルン国立図書館所蔵のマルティウス、リービッヒ、シュラギントワイト兄弟の遺稿、あるいは関係資料の目録である。この図書館では、この種のテーマ別の所蔵目録を発行していて、これは第10巻第2号である。

Die Nachlässe von Martius, Liebig und den Brüdern Schlagintweit in der Bayerischen Staatsbibliothek

所蔵目録だから、シュラギントワイト研究の直接の文献ではないが、研究する場合に大変役立つ文献目録である。

内容は「序文」に次いで3人に関する記事が載っている。シュラギントワイトの項は最後である。

この項は、まず生涯と業績が簡単に述べられ、遺稿について説明されている。本題は、その後に続く遺稿の目録である。

Ⅰ　アルプスのスケッチ、図版、地図
Ⅱ　アジア旅行の手稿
Ⅲ　インド及び高地アジア旅行で描いたスケッチについての説明草稿及びコピー
Ⅳ　アジア旅行の詳細な資料
Ⅴ　ロバート・シュラギントワイトの報告書の資料
Ⅵ　エミール・シュラギントワイトの遺稿
Ⅶ　補遺

Ⅰのアルプスに関する業績は、日本においてほとんど言及されていないが、シュラギントワイト兄弟はアジア旅行に出かける前に、アルプスにおいても山岳調査研究をしていて、分厚い学術報告書を発表している。そして『インド及び高地アジア学術調査報告書』についているアトラスと同様に大判のアトラスがついている。そして、アルプスの山々の美しい石版画が載っている。

アルプスに関するスケッチ、地図などは7巻にまとめられていて、地域別に整理して記述されている。

Ⅱは『インド及び高地アジア学術調査報告書』の草稿で、各項目ごとに整理されてあげられている。本来は46巻だが、第3巻は失われて現存は43巻である。

Ⅲは17巻と索引1巻で、第18巻と第19巻は合本されている。本来は20巻だが、第10巻と第17巻は欠本である。『インド及び高地アジア学術調査報告書』のアトラスの絵を見るためには、ぜひ参照したい資料である。

Ⅳは、風景水彩画の着彩写真、人物のスケッチ及び写真、ボンベイの建物の写真、アトラス、地図原稿、手紙・旅券・草稿の6つに分けて掲載されている。このうちアトラスは、『インド及び高地アジア学術調査報告書』のアトラスの第1分冊そのものである。分量では地図原稿が最も多い。

Ⅴはロバートの旅行先からの手紙が大部分で、それに2つの論文がついている。

Ⅵは、エミールの草稿（主としてインド及びチベットの言語研究）、種々のメモ、そのほかシュラギントワイト五兄弟関係の文書などである。すなわちエミールばかりでなく、シュラギントワイト・ファミリーの文書を集めている。

Ⅶは、ほかの施設にあるシュラギントワイト兄弟の遺稿や関係文書があげられている。

巻末には74ページにわたる詳細な索引が、人名、地名・事物のふたつに分かれてついていて便利である。

発行が1990年で、だいぶ以前のものだが、ドイツのハイヘル氏の厚意で、ごく最近、日本山岳会に寄贈されたものである。

（水野勉）

オピニオン

各支部で展開する「森づくり」活動のあり方

宮崎幸博

最近、各支部では「森づくり」活動が活発である。日本山岳会の自然保護活動の数ある展開のひとつとして、今後も活動の輪が広がっていくに違いない。そこで、私は今後の「森づくり」活動展開にあっては、現状のような各支部の自主性にすべてを任せる運営でなく、日本山岳会本部が「森づくり」にかかる基本的な方向と、守らねばならぬ最低ルールを示すことによって、ひとつの方向に向けた活動を展開すべきであると考える。

ちなみに、私は「高尾の森づくりの会」が立ち上がった平成12年から活動に参加し、今夏延べ200回目の活動参加を迎えた。この足かけ9年にわたる自己の活動を振り返り、「高尾の森づくりの会」参加の実績と、運営実態を間近に見聞してきたことを踏まえて、今後の各支部における活動展開に資する幾つかの提案を試みたい。

「高尾の森づくりの会」からの教訓

①森林ボランティア活動としての「森づくり活動」にのみ軸足を置き、営利活動には手を出さないこと。

そもそも日本山岳会は民法第34条に基づく社団法人として設立される際、「営利を目的としないこと」を前提として認可を受けている。現在、公益社団法人としての選択をするか否かの検討の最中でもある。外部からの誤解を招きかねないことは避けるべきであろう。

そうした折り、最近、「高尾の森づくり」に隣接した場所にあるロッジの運営を「われわれがやれば何とか黒字化が望める」という理由で、「森づくりの会」が引き受けようという動きがあった。契約書まで交わそうという段階で、山岳会本部の知るところとなり、ストップがかけられたが、そこまで勝手を許していたことに問題がある。

長期にわたって森林整備が行なわれた「高尾の森づくり」

「黒字化が望める」とは、まさに営利活動そのものと言えるのではないか。こうした動き、あるいは考え方を事前にチェックするシステムがないのか。あっても機能しなかったのか。

②安全最優先の思想を前面に据え、常にそれを徹底すること。

労働災害のなかで山林労働は事故率がトップクラスである。本業とするプロの人たちの罹災率が高い山林作業は、必然的に森林ボランティアにとってはさらにリスクの高いものとなる。従って、山林作業に当たっては安全が最優先する。

「高尾の森づくりの会」の活動エリア内で、森林管理署が外部委託した作業中に重機が谷に転落する重大事故が発生したことがある。こうした際、森林管理署は迅速にミーティングに参加して、管理監督責任や今後の指導強化についての説明を行ない、われわれに対しても作業の安全を呼びかけるのが筋と考えるが、その時、事故があったことさえ明らかにされなかった。

さらに今年2月には、専門班活動中に、「高尾の森づくりの会」会員の手の指が切断寸前になるという事故が発生した。極めて重大な事故にもかかわらず、報告されていない。理由の如何を問わず、オープンにして安全最優先を呼びかけるべきであった。事故発生はまた、大小の如何を問わず山岳会本部に報告するよう義務を課すべきと考える。

③会の自主性、独立性ある計画を組むこと。

各支部での「森づくり活動」にはそれぞれ、立ち上がり時の経緯、エリア選定などでは、各地域の特殊事情、背景などがあったに違い

ない。こうした地域性、自主性、独立性は尊重しつつも、決して行政の下請け作業的なものにならないよう留意すべきである。

国有林で活動を展開すれば、森林管理署（林野庁）は最重要なパートナーである。しかし「山」には環境省、国土交通省といったところも同様に関与する。私達はこれらを横断したところで「自然」と関わっている。林野庁は国有林を国民に代わって管理している役所であり、森は決して林野庁の所有物ではない。そこにお互い、錯誤が生じていないか。

植樹のための作業だけが「森づくり」ではないと思うし、「分収育林」の政策に沿って同じような役割りを担っているわけでもない。そもそも毎年、植樹しなければならないのかという単純な疑問が「高尾の森づくりの会」会員の間に広がりつつある。要するに日本山岳会の森づくりは、行政の下請けであってはならないということである。

④執行部、事務局の人選は恣意性を排除し、人事の客観的基準を明示すること。

会の主要人事は、山岳会本部と同じく任期を明示して入れ替わることが望ましい。立ち上がり当初はともかく、いまは参加実績、熟練度、知識、人望などを勘案して、参加者みんなの中から執行部、事務局の運営スタッフを選任するようにしたらどうだろう。人事は公明、公正である上、公平性を保つ選定基準がなければ運営が偏り、活力を削ぐことになりかねない。「高尾の森づくりの会」の場合、作業班のリーダーは後継者育成という観点から数年に1度交代しているものの、事務局、特に行政との窓口は常に1人に委ねてきている。特に山林所有者、あるいは管理者と接する窓口担当者は、それらとの利害のない人を選ぶと共に、常に複数配置しておくことが情報共有と透明性、後継者育成の見地から重要である。

⑤透明性ある予実算管理を義務づけ、本部による監査態勢を構築すること。

日本山岳会本部は各支部の「森づくり」の会計を把握、監理すべきである。各支部が日本山岳会傘下の組織として活動を展開するならば、いわゆる連結決算の対象として、当然本部との整合性が求められる。適正な管理運営が行われているかどうか、常に本部機構がチェック出来る仕組みづくりが肝要である。

「高尾の森づくりの会」の場合、予算、決算の報告書は年1回催される総会に出席しないと受け取れない。総会直後の会報送付時に封するのがあるべき姿ではない。ディスクローズ要求への回答が「信用してほしい」では納得できないではないか。領収証、使用経緯説明書を常に整理し、閲覧出来る態勢をとるのが常識である。

寄付金、助成金拠出の法人、個人にはその多寡に関わらず、使途について個別にきちんと報告し、理解と賛同を求め、さらに継続した協力を求めるのがあるべき姿で、現状は、それが公平に行なわれているとは言いがたい。

チェック機能の必要性

冒頭にも書いたように、20回通った背景には「高尾の森」魅力に取り付かれたことが大きいのおのずと愛着も生じてくる。この「高尾の森づくりの会」を立ち上げた関係者の努力は評価されるべきと思う。スタートしたとき、その清新さは言うに言われぬ魅力を醸し出していた。

しかし、一般論としても、物事が順調に推移するようになると、多くの人々の協力のお蔭という考えが後退して、独善に陥りかねないのが人の常でもある。「初心、忘るべからず」の気持ちを持続可能にするには、こうしたチェック機能との有機的な連携が欠かせないと思うのである。

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

アルプスの北壁めぐり

鈴木正規

ヨーロッパ・アルプスの登山基地シャモニの北東を流れる長大な氷河は、真っ青な冷たく美しい肌を呈し終わりを告げる。メール・ド・グラスの奥、レショ氷河が生まれる所、そこにグランド・ジョラスがある。

一昨年の冬には遠くスキー場から眺めたのであったから、「ああ、あれがグランド・ジョラスか」という程度の感情しか起こらなかった。冬であったので登山のできなかった当時の私には、アルプスのスケールが充分に分かっていなかったので、こんな気分で眺めてしまったのである。

昨年の夏、メール・ド・グラスを登り、クーヴェルクルの小屋から晴れ上がっていくガスを通して間近にグランド・ジョラスの壁を眺めた。その時のものすごい印象は、感情を遥かに越えてショックに近かった。それは、首筋が痛くなるほど仰がねばならないくらい高く、視界一杯に広がるその横幅は、まるで大空を割ったように眼前に展開する。それは「ここを本当に人間が登ったのか！」と、自問自答したくなるような岩壁であった。

その後、私が思わぬ高い位置に仰ぐその山、その岩壁を眺めて驚いたのは、スイスの最も代表的な山の街、ツェルマットから見るマッターホルンである。

ヴィスプの谷の奥深く、山の街の雛形のように素朴で美しいツェルマットに着き、馬車に乗ってホテルに向かって走っていると駁者が馬を止めて「セルバン」と言う。きょろきょろと見回したが見えない。不思議に思っていたら、駁者が空の上部を指して「あそこだ」と言う。まさにあった。それほどマッターホルンは高く大きかったのである。そしてツムット山稜とヘルンリ山稜との間が、マッターホルンの北壁だった。

また最も北壁的であるのが、アイガーの北壁であろう。残念なことに、私はこの壁を晴天の中で一度も見ることができず、吹雪の続く合間からちらりと見たにすぎない。しかし、雪に濡れ鈍く光る岩壁、暗い岩肌に張り付いた氷壁の姿は実に素晴らしいばかりだ。

ドリュでもグランド・ジョラスでもマッターホルンでも、そこには自然界の造型の妙があった。思わぬ機会を得て、冬と夏のアルプスを訪れることのできた私も、この言い知れぬ恐怖と魅力をそなえる北壁亡者になりそうである。

ウェストンと謎の笠ヶ岳

田畑真一

明治27年8月3日、ウェストンは宿願の笠ヶ岳へ登頂。彼は同年同月14日、御岳にも登頂した。島田巽らが紹介（「W・ウェストン年譜」『山岳』第八二年）している。

彼は御岳山頂での感動の展望記事を書いていた。

「日の出のとき、輝かしい雲が壮観。山がだんだんせり上がるように見え、手前の乗鞍を含めた飛騨（ヒダ）山脈がすばらしい。大蓮華、立山、槍ヶ岳、笠岳？　穂高、常念」（三井嘉雄訳『日本アルプス登攀日記』）

彼は笠岳、つまり笠ヶ岳については「笠岳？」と書いた。「あの山は笠岳だろうか」との不確かな気持ちがあったからに違いない。彼

は笠ヶ岳へは12日前に登頂したばかりでもあった。笠ヶ岳への思いも深かったと思われる。

展望記事にあるその他の山名（乗鞍など）も、すべて彼が登頂ずみ（拙著『知られざるW・ウェストン』）の山々であり、その山名だった。だから、彼にしてみればこれらの山々への思いがあった。それに「あの山は○○岳だ」などと、山の姿・形が理解できた表われでもあった。

私は彼が「笠ヶ岳？」と書いた点の真偽につき、結論づけておきたい。これはやはり、笠ヶ岳だった。御岳の山頂からは、笠ヶ岳はあまりにも遠方であり、小さな山頂部分が望まれるだけという状況だ。

小さな山頂部分であれば、山座同定も困難となる。ウェストンが「笠岳？」とした点、もっともだと思う。それに彼は御岳から笠ヶ岳の姿・形がわからなかったのかも知れない。

彼の笠ヶ岳への憧れ。この点についても触れておこう。彼が初めて笠ヶ岳を眺め、登頂の意欲を持ったのは明治25年8月、槍ヶ岳への登頂時だった。私の推測だが、この時点以前に、こうした状況を書いた記事が見あたらないからだ。その槍ヶ岳山頂からの展望記事とは。

「西方には蒲田川（ガマダガワ）渓谷の向こうに笠岳（笠ヶ岳）が見えているが、これは登ってみればずいぶん面白そうな山である」（青木枝朗訳『日本アルプスの登山と探検』）

繰り返しになるが、彼の槍ヶ岳への登頂は明治25年8月だった。ただ、前年の8月には降雨のため、山頂直下で登頂を断念。だから、この時点では笠ヶ岳を眺められなかったのであり、笠ヶ岳展望への伏線としておきたい。

彼は明治25年8月、笠ヶ岳への登頂を計画した。しかし、現地では山案内人の斡旋を断られて断念。翌26年8月、再挑戦をしたものの、この年にも山案内人の斡旋を断られた。つまり、断念だ。

明治27年8月の登頂たるや、3度目の正直だった。それも外国人としての初登頂。挑戦し続けた執念の結実だった。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

資料映像委員会

第12回全国山岳博物館等連絡会議を開催

10月18日13時から17時まで山岳会集会室にて開催した。

参加館は東京都写真美術館（東京）、秩父宮記念スポーツ博物館（東京）、大町山岳博物館（長野）、田淵行男記念館（長野）、松本市山と自然博物館（長野）、富山県立山博物館（富山）、立山カルデラ砂防博物館（富山）、奇石博物館（静岡）で、8館9名の参加があった。日本山岳会からは羽田委員長、近藤・田畑・溝口・鈴木・誉田・中野・斎藤各委員が出席した。

会議の冒頭に宮下会長から、「当会は創立100年を超える歴史と伝統を持つ。今後もこの山岳文化を継承し、大事にしていきたい。当会議が12年間継続していることの重要性にかんがみ、より良い情報交換をお願いしたい」との挨拶をいただいた。

会議では、各館から本年度の活動と次年度の計画について報告があり、それについて質疑応答や企画展・運営等についてさまざまなアイディアが出され、活発な情報交換がなされた。

お互いに企画内容を持ち寄り、参加者間で知恵を出して内容を揉んだり、助言をしたりするとよい。また、参加館同士での共催事業や巡回展の開催もたくさん生まれるようになるとよい、などという意見も出た。委員会としても今後の課題として検討していきたい。

秩父宮記念スポーツ博物館が来年の1月に開館50周年を、田淵行男記念館が再来年開館20周年を迎える。資料映像委員会としても協力していく所存である。

12年間継続してきて、同じ仲間という雰囲気の会議になってきた

会議では活発な情報交換がなされた

ことも素晴らしいことである。こういう雰囲気がないとなかなか本音の情報が得られないからだ。

今後も親密な情報交換の場として発展するよう委員会として取り組んでいきたい。そのひとつとして、それぞれの山岳博物館を会報『山』で紹介していくことを企画している。

（鈴木敬吾）

集会委員会

奥入瀬、南・北八甲田山行

10月3日から5日、集会委員会主催の山行に参加した。初日は木洩れ日の奥入瀬渓流を石ヶ戸から子ノ口まで約9キロ歩き、かすかに色づいた木々や奇岩、趣の異なる数々の滝を楽しんだ。

2日目は、猿倉温泉から駒ヶ峰までの南八甲田のコース。昨夜からの雨で急に紅葉が鮮やかになったと登山口で自然監視員氏が話していた。このコースはなだらかな登り頂上直下まで続く。道は、植生回復のため一切整備しない方針なので、このことを承知して登ってほしいとのことだった。

歩きはじめてすぐコケむした石積みが続いていることに気がつく。あとでこれは、昭和5、6年の東北冷害時の救済事業として十和田湖に抜ける観光道路を造った跡である。途中の沱（やち）は、秋色に染まつあ中断し、そのまま自然にもどりつつある。途中の沱は、秋色に染まって池塘に紅葉が映えて美しい。夏にはこの湿原をキンコウカが黄色に染め変えていることだろう。駒ヶ峰の頂上直下からの登りは、クマザサをかき分けての難儀な道。苦労した割に展望がない。急いで下った休憩場所では、担当者心づくしの茸汁が待っていて、東北ならではのおいしい昼食になった。

最終日は、酸ヶ湯から大岳に向け出発。天気もよく、登山道から横岳、櫛ヶ峰、猿倉岳、小岳、高田大岳、前日登った駒ヶ峰がきれいに見える。仙人岱から最後の急登。大勢の登山者の列が見える。われわれもその仲間入り。一歩一歩かみしめるようにして頂上に着く。

あとは紅葉を愛でつつ下るのみ。田茂萢岳分岐手前の階段から俯瞰する毛無岱の紅葉がこの日のハイライトであった。草紅葉とカエデの黄、ナナカマドの赤、アオモリトドマツの緑が織りなす色彩に歓声があがる。久しぶりに東北の秋を満喫することができた。

今回も含めて数回山岳会の集団登山に参加して自戒もこめて思うことがあった。熟年者で構成されることがほとんどの山行で、自己主張や思い込みが「話を聞けない」状況を作っている。参加者は、山のベテランであっても、集団登山に参加したからには「聞ける」人にならなくてはと反省している。

（栗林紀子）

緑爽会

座談会『静かなる山』とその仲間たち

今からちょうど30年前、川崎精雄、望月達夫、山田哲郎、中西章、横山厚夫氏らJAC会員5人の共同執筆により出版された『静かなる山』は、ヤブ山党のバイブルになった。「何の変哲もない、小さなこぶみたいな山のことを綴ったとて、どういうこともないかも知れないが我々にはこうした山登りが楽しいしこれからもやめられない。同じ思いを抱いている人たちにも読んでもらいたいと仲間5人が分担執筆をくわだてた」とまえがきに記した望月達夫、川崎精雄2人の名誉会員は残念にも鬼籍に入られたが、ご健在のお三方をお招きして当時のお話を伺った。横山隆会員の司会で始まった座談会は三人三様、それぞれの性格が出ていて興味深く拝聴した。

亡くなったお2人の思い出としては、望月さんは何事も筋論でいく、きっちりした方で、50冊位の山日記に克明にメモされておられ、アルバムも写っている人物の氏名が漏れなく記入されていて「そつなし居士」の面目躍如。

一方、川崎さんは若干アバウトな、茶目っ気ありで、山行では苦もなく両夜行をこなして銀行マンとしては頑丈な人という印象を受

けたという。お2人は仲がよく、いいコンビだったとのこと。

『静かなる山』を最初に企画し、山の選定も手がけたという横山さんによると、5人とも比較的中央線に出やすい所に住んでいたせいもあって、なんとなく集まってはよく山へ出かけていたが、あるとき望月さんに「本にまとめてみたら」と提案したら賛成してくれた。川崎さんからは「茗溪堂の坂本君を知っているので、頼んでみるから編集は君がやれ」ということになった。取り上げる山は皆のストックの中から選び、新たに歩いたという山はない。百座にしなかったのは紙どりの関係で、あと三座増やすと紙が余計にいるので定価とのからみで97座にしたそうである。

『静かなる山』について語る左から横山、山田、中西の三氏

さっそく宮内庁からも注文があり、お蔭さまで重版されたのも、当時このような本があまりなかったのでアピールしたのだろうとのこと。

出席者からは、内容も勿論だが造本装丁も素晴らしく、いまだに愛読しているという賛辞も聞かれた。

11月20日の104号室は、信濃、越後、山梨からの会員も合わせ出席者は50人を超え、盛況だった。当初、どのくらい反響があるかと気がかりだったが、山岳文献に関心のある会員が少なからず健在するのを目の当たりにして心強かった。

（松本恒廣）

山の自然学研究会――記念講演会――北アルプス成立の謎を探る

10月4日、記念講演会を開催、参加者は35名であった。

山はなぜ高くなるのか、講師、信州大学教授・原山智氏の講演は、ここから始まる。われわれに地質学、地理学の面白さと、目の前の斜面だけに目を落としながら黙々と登るだけではない、山のダイナミズムを堪能させてくれた。いつも慣れ親しんでいる北アルプスの成立から、上高地がどのような場所なのかを再認識させる。地質学のセンセーション「超火山」のさわりを聞かせていただいた。

若いころから地質調査所の研究員として、現場を歩いてきたそうである。研究は露頭の観察である。これが一次情報になる。露頭は渓谷沿いに多いので、どうしても沢を詰めて遡行する。それが点と線の二次元情報となる。行動だけを見る限り、この辺りまでは、われわれの日常と似たようなものである。これから先は、大違いである。これらの情報を集めて、三次元化し、さらに自然誌の所見を加味して四次元化する。その一連の作業を、北アルプスの現場を捉えて、垣間見せていただいた。「超火山」は、自然史の中に熱い噴煙を上げているのである。

山の自然学研究会が、毎年、上高地で行なっている「インタープリテーション」も今年15回を迎えた。講演会は、その記念講演会であった。テーマのひとつ「上高地」も、日ごろ慣れ親しんだフィールドについて、新しい視点をもたらしてくれる。来年は、これまでとは違った視点で、上高地の自然にふれる橋渡しをする、そのようなことができるに違いない。

記念講演会をとおして、このような熱いエールをお送りいただいたことに、厚く感謝したい。さらに、この15年間にわたり、応援いただいた皆様に厚くお礼申し上げ、引き続きご助力、ご助言を賜りますよう、お願い申し上げるものである。

（大船武彦）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

秋田支部

古道・仙北街道　柏峠山行
――歴史の道を歩いて

9月21日、久しぶりに支部山行に参加した。柏峠がどこにあるかもわからず、勉強不足を恥じた。

調べてみると、仙北街道は、仙台藩と秋田藩を結ぶ奥羽山脈越えの山道で、東成瀬村手倉から柏峠（1018メートル）を経て、岩手県胆沢町下嵐江に至る24キロのこと。文献によると、宝亀7（776）年に登場し、のち「三年の役」では源義家が通り、江戸時代には飢饉の救援米を大量に運んだなどとある、1000年を超す長い歴史をもった街道ということである。

当日は、集合時間前から雷と雨で気持ちが萎えてしまっていたが、「現地集合」の一声で、一路十文字の道の駅へ。参加者15名は、車4台に分乗し、道の駅を7時30分に出発し、東成瀬村豊ヶ沢林道へと向かった。雨が降っていたことや、林道の状況などわからないこともあって標高660メートル付近に駐車。諸般の事情で参加できなかった支部長差し入れのバナナを食べて、8時55分、柏峠へ向けて歩き出した。45分ほどで林道終点「姥懐」に到着。古（いにしえ）のブナ道・仙北街道に一歩を踏み入れた。

起伏の少ない歩きやすい道に、当時の測量や道路建設の技術も発達していなかったことを考えると、先人の知恵と技術に驚かされた。途中、十里峠、藩境塚、丈の倉、引沼と石碑をたどりながら歩き、柏峠には10時50分到着。三等三角点と主三角点があった。

雨が小降りとなってきたのでここで昼食とする。その間に雲の切れ間から東山をはじめ北栗駒の山々も見えだした。機会があったら柏峠より先に行ってみたいと思いながら、12時10分、下山開始。雨もあがり、登山道からは焼石岳、三界山、合居、大森山、蟻巣山等が見えていた。途中でキノコ採りを楽しみながら林道終点「姥懐」には13時25分、車の置いてある場所には14時に無事下山。

今回の山行は、先人が歩いた「歴史ある道」を歩くことができ感動したと同時にこの企画に感謝したい。

（鈴木美代子）

歴史を感じさせる柏峠にて

宮城支部

支部創立50周年記念事業

槇有恒氏（仙台市出身）によるマナスル初登頂が1956年5月9日、当支部はその2年10日後の58年5月19日に設立発足した。本年は50年の節目の年を迎え、千石支部長を中心に各種記念事業遂行のための三つの部会を設置した。

一つは記念登山部会。昨年の宮之浦岳、開聞岳に続いて今年7月にはヨーロッパ・アルプストレッキング、細川会員によるモンブラン登頂は「50周年」に花を添えた。

二つは記念誌編集部会。半世紀にわたる歴史の掘りおこしには特に時間を要したが、ほぼ完全に支部史を網羅。宮下会長はじめ、北海道・東北・越後各支部長、元支部長の心温まるご寄稿ご祝辞とともに上梓発刊することができた。

三つは10月18日、ホテル仙台プラザでの記念式典部会。中村保会員による「ヒマラヤの東――チベットのアルプス」の講演会を広く一般公開とし、聴衆一同、同地の未踏の山々に熱い思いを馳せた。

続く北海道東北地区集会、記念式典、懇親会にいたる一連の式事には宮下会長、神崎副会長、吉永常務理事ほか103名の方々にご臨席いただき、当支部「50周年」を祝福していただいた。懇親会なかば、女声コーラスグループ「ス

テッラ」による「蔵王の歌」「夏の思い出」などの山の歌に会場は一層の盛り上がりを見せた。

翌19日は2班に分かれて行動。1班は仙台城址などの市内観光班。仙台市博物館では館長じきじきの説明を受けるなど、各所市内見学を楽しんだ。一方、登山班は仙台近郊の泉ヶ岳、北泉ヶ岳山行で会員間の懇親を深めた。ところで、泉ヶ岳頂上近くで、かなり強烈な「異臭」がしたことをご記憶だろうか。熊の体臭からくる残香？　など、諸説紛々だったが、噂の主はついに姿を見せることなく、無事、全員登頂、下山することができた。

解散後は船形山、金華山、錦秋のみちのく路へと向かう人も多く、さすがJACの会員とお見受けした。

おかげで、当支部「50周年」を盛会のうちに終了することができました。ありがとうございました。

（三宅　泰）

全国より参加した103名の参加者とともに50周年を祝う

北九州支部

第24回全国支部懇談会開催

10月11日～12日、第24回全国支部懇談会を開催した。当地は著名な山に恵まれず、観光地としての温泉もない所なので、はたして何人の参加が期待できるのか心配であった。しかしその心配をよそに、首都圏をはじめ全国から21支部、196名の参加をみることができた。また、来賓として、北九州市副市長・橋本嘉一氏にご参加いただいた。

冒頭、宮下秀樹会長より「このたびの支部懇談会の開催は北九州支部創立8年目の快挙である。日本山岳会の新法人に向かっての諸問題を乗り越えて、全国規模の〝森づくり〟運動、またできれば国民レベルでの〝山の日〟を記念日として制定する、などを実現していきたい」との挨拶があった。

続く記念講演は、「松本清張と小倉」と題し、小林慎也氏（梅光学院大学教授）にお話をしていただいた。2009年に生誕百年を迎える清張は、小倉で生まれ40年を過ごした。芥川賞受賞後、社会派推理小説、歴史小説、ノンフィクション、古代史研究など幅広い分野で活躍した。清張には『遭難』、『文字のない登攀』という二つの山岳小説がある。『遭難』は鹿島槍を舞台にした作品である。小倉時代の苦労をバネに、後半生、一気に才能を開花させた清張の人生を1時間にわたり拝聴した。清張の文学と人生に触れ、感慨深いものがあった。

「小倉祇園太鼓」を披露する末広町町内会の皆さん

懇親会のアトラクションとして、400年の伝統を誇る、当地の「小倉祇園太鼓」を披露した。太鼓演奏は本年の競演会38団体中での優勝チーム、末広町町内会の皆さんによるもの。勇壮な太鼓の響きとバチさばきに、会場からは大きな拍手が沸いた。

懇親会のフィナーレは炭坑節総踊りである。全盛期の筑豊炭田を主舞台に歌われた炭鉱歌は、戦後、赤坂小梅により全国に発信され、民謡「炭坑節」として定着した。その「炭坑節」を参加者全員で輪になり、踊った。

翌12日の記念山行は好天に恵まれ、それぞれに堪能していただくことができた。Aコースの北九州最高峰・福智山登山、84名参加。Bコースのカルスト高原平尾台・貫山登山、23名参加。Cコースの歴史探訪・関門歴史ツアー、宮下会長以下61名参加。参加していただいた遠方の会員より、楽しんでいただけた旨のお便りを頂戴し、支部一同安堵し、嬉しく思う。

2年後には、支部創立10周年を迎えます。皆さま方の更なるご指導、ご教示をお願い申し上げます。

（大庭常生）

図書紹介

『生還——山岳捜査官・釜谷亮二』

大倉崇裕・著

2008年9月
山と溪谷社刊
四六判　300ページ
定価　1890円

山岳ミステリー小説で、著者は大倉崇裕。創元推理短編賞や小説推理新人賞などに選ばれた、現在注目の作家だ。本書以前に、長編山岳ミステリー『聖域』を発表し、すでに高い評価を受けている。

本書は、『山と溪谷』に連載された短編「生還」「誤解」「捜索」と、新たに書き下ろした「英雄」の4作を収録した作品集になっている。いわゆる探偵役を演ずる山岳捜査官釜谷亮二は、前作『聖域』に続いての登場だ。

山岳ミステリーに分類される作品は、これまでにも多く出されている。しかし、山岳ミステリーというジャンルには、実際、独特の難しさがあるように思われる。要するに、山で起きた事件を題材にすれば、それで山岳ミステリーになるのか、ということだ。山が事件の舞台になり、都会のビルや巷（ちまた）の群衆のかわりに、尾根道や岩壁や渓谷の山岳景観が舞台装置として設定される。それはそれで、山好きにはけっこう楽しいとはいえ、何かそれだけでは物足りないような気がする。山が、背景・小道具以上のもっと重要な役割、あえていえば主人公的な役割を果たしてもらいたいという期待だろう。

本書は、そんな期待に対するひとつの応えとなっている点で、高く評価できる。ミステリーなので内容に立ちいった紹介は差し控えるが、各編に共通していることは、登場人物の山にかけた想いのドラマが描かれていることだ。そうした山への想いが軸になって事件が起きる。それは滑落だったり、遭難だったり、行方不明だったりする。山岳捜査官がその謎解きにあたるが、それは、犯人探しというよりも、山に込められた想いの糸を、山と向き合い山に問いかけることで解きほぐし、その織りなす心の秘められたドラマを再び紡ぎだす作業なのだ。その中で、関係する人間とともに、場人物の一向けられた山自身も登場人物の一人としての役割をになう。読み進むうちに、捜査の進行に山登りのイメージがオーバーラップして、それが読者の共感を演出する効果を与えている。

清澄な山の空気を感じさせる心地よいリズム感をもった文体で綴られる山岳描写は臨場感があり、かつ、どこかノスタルジックな雰囲気もかもしだしている。謎解きも充分意外性があり、ミステリーとしての完成度も高い。

山の小説が寂しくなっているなかで、本書を刊行した編集者の企画に対してもおおいに喜びたいと思う。

（飯田年穂）

『The ALPINE JOURNAL 2007 1857—2007（Vol.112, No356）』

Stephen Goodwin・編

2007年
The Ernest Press刊
A5変形判　434ページ
定価　£26.00

元祖・英国山岳会の創立150周年特集。カバーは、中心にゆかりの深いマッターホルンの水彩画を配して金線でかこみ、1857～2007と大書している。見返し（表から裏へ）は、アルプスに始まる150年間の華々しい初登頂（登攀）の一覧になっている。

序文には、昨年6月にツェルマットで開催された盛大な記念式典（カバー裏には華やかなスナップ写真集）で、マッターホルンに向かって帽子を振る英国人登山家の銅像（巻頭にカラー写真）をヘリコプターから除幕した報告がされていて、この町とアルパインクラブとの150年以上の親密な友好関係を強調している。

81ページにわたる特集は、そうそうたるベテランライターやクライマーによる、150年の回顧と展望

が語られていて、にぎやかで読みごたえがある。登山倫理について、ダグ・スコットはボブ・ディランとトーマス・ジェファーソンを引用しながら、固定ロープとボルトの断固排除を、エド・ダグラスはシンディ・ローパの歌詞になぞらえて商業主義（魂を商う）登山への辛辣な批判。中国の「山水画」の伝統を引きながら英国の登山家や文人の原生自然への接し方の変遷を論ずるなど、示唆に富む記事が多い。

また、アルパインクラブの登山史のなかで、節目となった英雄的、悲劇的な瞬間の写真コレクション17点は迫力に満ちている。

デニス・グレイの「勤労者階級クライマーの盛衰」は興味深い論考だ。アルパインクラブのエリート意識と老耄（ろうもう）ぶりを皮肉る書き出しで始まる。戦後生活に余裕が出ると、ロンドン以北の若者たちがクライミングに熱中しはじめて、革新的登攀を国内で展開した。彼らにエベレスト遠征こそかなわなかったが、生活水準が向上し「平等主義」も手伝って、50年代にはクラブメンバーを凌駕する実績をあげた。ドン・ウィランスやジョ・ブラウンたちが輩出して、アルパインクライミンググループ・ACGを組織し、多くの大学生クライマーを刺激して一層のクライミングの熱気が盛り上がったという。アルプスの登攀ガイドブックの刊行も手掛けたが、最終的にこの組織はアルパインクラブに吸収されたという。日本ではあまり聞けない英国の戦後登山史だろう。

こうした書き手の多くは中高年だが、巻頭の登攀記録欄にはウェールズ、スコットランドの厳冬期初登攀からペルーアンデスとネパールの新ルートへ転戦した若い冒険家の1年間の登攀記やベテランクライマーによるガンゴトリのケダル・ドームでのスリルにあふれた初登攀行は痛快。

老いたといえどアルパインクラブの多様性と力を見せつける年報である。

なお、巻頭登攀記録の田辺治氏「冬期ローツェ南壁―夢の実現」「三度目の正直」の書き出しで、激しい登攀の場面と執念が伝わる。山域別記録欄には、横山勝丘氏のボリビアとアラスカでの力強い登攀（『山岳２００７』所載）が取りあげられているし、旅・踏査欄には、今や常連寄稿家である中村保氏の「東チベット踏査」の続編もある。

（松沢節夫）

むさしの・多摩・ハバロフスク協会・編
『シベリア大自然――知られざる山河とタイガの植林』

2007年10月
東京新聞出版局刊
Ａ５判　296ページ
定価　1680円

むさしの・多摩・ハバロフスク協会は、１９９１年に始まったロシア連邦ハバロフスク市と東京の武蔵野市の交流が発展し、１９９６年に設立された。シベリアの寒帯林の保全、原生自然体験、ロシアの市民との交流が主要な活動目的。10年にわたって現地の人々とともにハバロフスク市近郊に「友好の森」づくりを推進し、シホテアリニ山脈周辺で、川下りを中心に青少年の冒険キャンプを実施している。

協会の足跡は、ハバロフスクを中心に東にシホテアリニ山脈、北東にアムール河河口、北にバム鉄道沿線、西にバイカル湖、南にウラジオストクと、広大な極東シベリアにわたる。

本著は、木を切らずに青少年の野外活動の場に使わしてほしいと自然活用型の森林経営をロシアの人々に提案し、極東シベリアでの青少年の自然体験の道を開いてきた武蔵野市の交流事業が、協会に引き継がれていったダイナミックな流れ、15年間を報告する。

流れを作ったものは、ハバロフスク市長からの青少年の招待を機に、武蔵野市の自然体験重視の教育と土屋武蔵野市長をはじめシベリアに魅せられた多くの人が事業を推し進めたことであった。

事業の主役は参加した日ロの青少年・市民である。シベリアの大自然の中で明るく活動する姿が写真と文章に溢れている。

事業は、シベリアの生の原生自然とロシアの人々に触れる感動を多くの人たちに与えてきた。

本書の構成は「寒帯林保全」「冒険キャンプ」などテーマごとに編成され、最終章はシベリアの森林と極限の森に生きる民を訪れた見聞記となっている。協会創立10周年記念出版である。

（三栖寿生）

会務報告

平成20年度第6回(10月度)理事会

日時　平成20年10月8日18時30分～21時

場所　日本山岳会会議室

【出席者】宮下会長、神崎副会長、宮崎・吉永・成川各常務理事、斎藤・藤井・石橋・古野・太田・堀井・山川・岡部各理事、深川・竹中各監事、河野・近藤各常任評議員、神長会報編集委員長

【委任】鯵坂副会長、相馬理事

【欠席】日下田常任評議員

【審議事項】

1・『山岳　第五十年』に掲載されている「宇治長次郎」写真の掲載許可について（宮崎）

富山県土地家屋調査士会から同会会報誌『らんどまーく』09年1月号に宇治長次郎の写真を掲載したい旨の依頼があった。（承認）

2・映像資料借用依頼について（宮崎）

飛騨山岳会から同会創立100周年記念催事にあたり当会所有の映像資料「THE EPIC OF EVEREST」及び「エヴェレスト征服」（いずれもDVD）を借用したい旨の依頼があった。（承認）

【報告事項】

1・平成20年度上半期予算管理報告（吉永）

会費収入は前年度同期に比し、金額にして約236万円、計画値に対する率にして約5パーセント弱いずれも下回っている。未納付者に対する催促を行なっていきたい。支出は今年度暫定取扱いの支部助成金約170万円の支出増があったため、全体として約3パーセント弱前年同期を上回っている。

2・飛騨山岳会創立100周年記念式典・祝賀会（宮崎）

11月16日に高山市で行なわれる記念式典・祝賀会に宮下会長が出席する。

3・山梨支部設立60周年記念集会の案内（宮崎）

11月15日に甲州市で行なわれる記念集会に宮下会長、神崎副会長が出席する。

4・地方公共団体から国所管公益法人への支出調査について（宮崎、吉永）

文部科学省スポーツ課から今回はじめての調査依頼あり、「支出なし」と回答した。

5・書換登録申請時期のお知らせ（宮崎）

特許庁から改正商標法に基づき「JAC」マークの書換登録申請手続時期について連絡があった。法令に則り手続きをする。

6・「法人土地基本調査」及び「法人建物調査」への協力依頼（宮崎）

国土交通省土地・水資源局土地市場課から調査への協力依頼があり、回答し協力する。

7・「山の野生鳥獣目撃レポートシステム」について（山川）

高山帯のシカ食害調査は日本山岳会（自然保護委員会）で取り組んできたが、単独での対応には限界であり「山岳団体自然保護連絡会」に呼びかけ、全加盟団体の賛同を得た。山岳7団体が窓口になって全登山者に情報提供を呼びかけることになった。トライアルシステムは社団法人日本山岳協会にて対応することになった。調査期間は2009年4月から5年間の予定。

8・文部科学省大臣交代に伴う兼職状況調査依頼について（宮崎）

文部科学省スポーツ課から調査依頼があり、「該当なし」と回答した。

9・HAJ華甲望年会の案内について（宮崎）

日本ヒマラヤ協会から12月13日開催の案内があった。

10・2008年度朝日スポーツ賞

候補者推薦依頼について（宮崎）
朝日新聞社から推薦依頼があった。該当者がいる場合には推薦いただきたい（締切り10月末日）。

11・第40回新入会員オリエンテーションについて（宮崎）
10月25日13時30分から例年どおりルームで開催する。

12・「名誉会員を囲む会」報告について（宮崎）
恒例の名誉会員を囲む会は名誉会員6名が出席して行なわれた（プラザエフで、本部からは常務理事以上5名が出席）。

13・岩手支部地震災害見舞金募金中間状況について（宮崎）
9月末時点の募金分約34万円を送金した。募金受付は年内継続する。

14・平成20年度永年会員資格取得者について（宮崎）
今年度資格取得者は35名の見込み。年次晩餐会で対象者を紹介する。

15・機関紙『第115号東海支部報』について（宮崎）
東海支部より寄贈されたので図書室に保管した。

16・会報『山』10月号編集報告（神長）

ルーム日誌 10月

1日　常務理事会　集会委員会
山岳地理クラブ
2日　学生部　アルパインフォトビデオクラブ　101会
3日　自然保護委員会　科学委員会
4日　山の自然学研究会　土曜会
6日　総務委員会　自然保護委員会　アルパインスキークラブ
7日　図書委員会　総務委員会
8日　アルパインスケッチクラブ理事会　資料映像委員会
9日　指導委員会　山想倶楽部
10日　学生部　山の自然学研究会
15日　高尾の森づくりの会　01会
16日　会報編集委員会　山岳地理クラブ　三水会　つくも会　アルパインスキークラブ
17日　総務委員会　図書委員会
18日　科学委員会　高尾の森づくりの会　アルパインスキークラブ
20日　定款検討委員会　総務委員会　九五会
21日　評議委員会　博物館会議
資料映像委員会　総務委員会　緑爽会
山研運営委員会　青年部委員会　山想倶楽部　00会
アルパインスキークラブ
22日　自然保護委員会　図書委員会
23日　会報編集委員会　海外委員会　山遊会　アルパインスキークラブ
24日　アルパインフォトビデオクラブ
25日　新入会員オリエンテーション
27日　資料映像委員会
28日　インターネット小委員会
29日　千葉支部　ゆきわり会
百年史委員会　101会
麗山会
30日　資料映像委員会　アルパインスキークラブ

10月来室者769名

会員異動（10月）

物故

稲田房子（5847）08・9・7
高橋　巌（8066）08・5・14
侍園　毅（12898）08・10・15
加藤慶信（12957）08・10・1

退会

安土武夫（8549）関西
吉武秀夫（10159）
及川宏子（13802）北海道
藤垣三知子（13824）北九州

INFORMATION

◆スキー&スノーシュー懇親会

集会委員会

恒例のスキー懇親会を開催。スノーシューハイキング（自由参加）、アルペンホルン演奏なども企画中です。現地集合・現地解散。

日時　1月10日㈯～12日㈪
宿泊　ホテル・アルペンホルン栂池高原
費用　2万3000円（宿泊・保険・通信費他）、リフト代別途
スノーシューハイク費用3000円（スノーシュー、ストック、昼食、ガイド料）
定員　35名
申込　12月10日までに野崎和彦宛
FAX 03-3821-0825
✉ nozaki_kaz@yahoo.co.jp
問合　TEL 090-8961-1866（野崎）
＊申込者に詳細案内を送ります

◆長野県警山岳遭難救助隊の講演会

指導委員会

「雪山救助現場の実際」と題して、講演していただきます。参加資格は特にありません。

日時　12月10日㈬18時30分～20時30分
場所　日本山岳会104号室
費用　500円
定員　40名
申込　森啓まで
FAX 03-3488-4670
✉ a_mori@h4.dion.ne.jp）
＊スペースの都合上定員を設けました。事前に申し込みをお願いします。なお、定員になり次第締め切らせていただきます。
＊電話での受付はしておりません。

◆穂高、剱、八ヶ岳の携帯向け天気予報――この冬 試験的に実施

指導委員会

今年の12月19日から来年1月18日にかけ、日本山岳会のホームページと、携帯電話で、北アルプスの「穂高・槍」「剱・立山」「八ヶ岳」の3地域を対象に、天気予報を発信します。

冬山登山者向けに、当会が初めて（試験的に）実施するもので、3つの山域につき、山の天気に詳しい気象予報士によって、的確な情報が流せるよう準備中です。

携帯向けについては、事前に登録（無料）をする必要がありそうです。

詳細が決まり次第、当会ホームページでご案内します。

問合　古野淳まで
TEL 03-3437-8848）

『会員名簿』と『山岳』の同時発送について

『会員名簿 2008年版』と『山岳 第百三年』を11月中にまとめて発送し、各位にお届けします。なお、会員名簿については個人情報保護の観点から、取り扱いに十分ご注意のほど、お願い致します。

総務委員会

図書受入報告（2008年10月）

著　者	書　　名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
岩坪五郎	ゴローのヒマラヤ回想録	235p／20cm	ナカニシヤ出版	2008	出版社寄贈
弘前大学医学部山岳部山の会(編)	未踏峰に挑む――弘前大カラコルム遠征隊1984の記録	87p／20cm	弘前大学出版会	2007	発行者寄贈
山崎猛	オホーツク――流氷の季節	196p／27cm	里文出版	2008	著者寄贈
日本山岳会宮城支部(編)	宮城山岳――宮城支部設立50周年記念誌	174p／26cm	日本山岳会宮城支部	2008	発行者寄贈
南会津山の会(編)	南会津――南会津山の会創立50周年記念誌	143p／21cm	南会津山の会	2008	発行者寄贈
望月英子	山はみちづれ――北の杜文庫 No.714	307p／16cm	北の杜編集工房	2003	千田早苗氏寄贈
柴崎徹	生きとし生けるもの――伊豆沼・内沼からの伝言	187p／22cm	河北新報社	2001	千田早苗氏寄贈
小谷隆一	山なみ帖 その後	277p／21cm	茗溪堂	2008	出版社寄贈
馬場勝嘉・渡部温子(編)	ヒマラヤ登山記録集成（第2巻）――日本人の天空に輝く軌跡	455p／27cm	馬場勝嘉（私家版）	2008	編者寄贈

●さんけん通信●

テラスのちりは季節の便り

山研管理人　内野慎一

新雪がきた初冬の焼岳

10月下旬、周りの木々がすっかり葉を落として、山研から枝越しに穂高と六百山を仰ぎ見る時期になりました。林の間からは、梓川をはさんだ対岸のカラマツ林も見えるようになります。紅葉の最終ランナーらしく、華やかに午後の光を浴びて輝いています。

その背の高いカラマツの下半分がレモン色に覆われていることに、ふと気づきました。それは、こちら側の岸に生えているヤナギの黄葉でした。冬が近づいて寂しくなってきた林の奥に、山吹色とレモン色の２つの明るい色を見つけて、私も少し元気づけられました。閉所に向けてあれこれやることが残っていて頭と手は忙しく、また心は寂しくなってきたところでした。

そんなときある方が「まだヤナギの黄葉が残っている時期に、カラマツが色づいているのが変な感じだ」とおっしゃいました。毎年この時期に訪れるというその方の言葉に、「なるほど、去年まで気づかなかったのは２色同時には黄葉していなかったからかもしれないな」と思いました。

もうひとつ今年目に留まったのがウワミズザクラでした。ダイニングルームの小窓から見える赤味がかった色が、その辺りではひときわ目立っていました。毎年毎年顔なじみの木が増えていくようで、嬉しいことです。

10月最後の週末は、千葉から19名の大勢の方々がそれぞれスケッチブックやカメラを携えていらっしゃいました。あいにくの曇り空で雨もぱらつきましたが、しっかり雪化粧した山をガスの切れ間から眺めて帰られたことと思います。それ以降、気温の上がらない日が続いており、山ではこの時の雪が根雪になりそうです。

その土曜の夜中から翌未明にかけて雨も風も強くなり、広葉樹のなかでは最後まで粘っていたハルニレの黄葉がいっぺんに吹き飛ばされ、テラスに分厚く積もりました。朝いちばんでぎょっと驚き、それが顔に出てしまったのでしょうか、「この季節は落葉掃きが大変ですね」と声をかけていただきました。

テラスの掃き掃除も去年まではとにかくきれいにしなきゃと頑張っていましたが、今年は少し違いました。芽吹きで落ちたカツラの殻、ハルニレの花や種、夜の明かりに集まる蛾や虫の死骸、時にはサルの緑の糞、そして秋の落葉と、季節の移り変わりを感じつつ、また少しこの辺りの自然と仲良くなれたような気がしました。

❖編集後記❖

●10月号の編集中に、クーラカンリで３名が遭難したという悲しいニュースが飛び込んできました。それも中村進、加藤慶信、有村哲史の３人というではありませんか。痛恨の極みで言葉もありませんでした。10月から11月にかけて追悼会や偲ぶ会が続きました。

●高峰登山とは、そうした危険と紙一重の状況に自ら踏み込む行為かもしれません。しかし、悔いだけは残ります。山岳雑誌の編集という仕事がら、これまで何十人という登山家の追悼会に出席してきました。気丈な家族の方たちの姿を見るにつけ、登山の非情さを思います。植村さんの公子夫人が記者会見でおっしゃっていた「冒険とは生きて還ってくること」という言葉が忘れられません。（神長幹雄）

日本山岳会会報　山　762号

2008年（平成20年）11月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102―0081
東京都千代田区四番町5―4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261―4433
FAX　東京(03)3261―4441
発行者　日本山岳会会長　宮下秀樹
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社